

St. Luke's International University Repository

学術活動報告(1999年度)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/375

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



学術活動報告（1999年度）

WHOプライマリヘルスケア看護助産協力開発センター

1. グローバルネットワーク

1) WRPOへの活動計画（A Plan of Work）の提出（5月）

WRPO事務局からの要請を受け、当センターの今後の活動に関する活動計画（A Plan of Work）を3部構成（Part1- Plan of work, Part2- Description of the center, Part3- Description of the activities）で作成・提出した。

2) Cooperative Project活動

今年度も千葉大学看護学部との協力関係を継続し、研究活動や情報提供活動において協働した。

3) その他

Global Network of World Health Organization Collaborating Centers for Nursing/Midwifery Developmentの事務局（マンチェスター大学）から2月付の文書で1998-2002年までのstrategic planが届いた。

WRPOのRegional Director にDr. Sigeru Omi が1999年2月1日付で就任し、Position Paper が届いた。また、WRPOのRegional Adviser in Nursingであった Dr.Ruth Starkがフィリピンでの任務を離れ、パプアニューギニアへ移動したとの知らせがあった。

2. 活動報告書（Annual Report）の作成（12月）

当センターの活動報告の9巻目として、1998年4月～1999年3月までの活動報告を12月に作成し、国内関連省庁および看護大学、国外関係機関に配布予定。

3. 研究活動

看護の質の確保に関する研究（平成11年度厚生科学研究費補助金・医療技術評価 総合研究事業）

本研究は、日本における看護の実践や教育を踏まえ、プライマリヘルスケアの看護モデルを開発し、プライマリヘルスケアの推進をはかることを目的としている。

2年目の本年は、日本におけるプライマリヘルスケアの黎明期から現代までの活動における看護モデルの探索を行った。

4. 国内外への情報提供活動

1) 雑誌『かんご』に「WHO NEWS」を隔月で掲載した。掲載誌は下記のとおり。

- ・ 51(6)5月号（酒井禎子） ・ 51(9)7月号（森明子） ・ 51(11)9月号（押川陽子）
- ・ 51(13)11月号（成瀬和子） ・ 52(1)1月号予定（森明子）

2) Global Network事務局（マンチェスター）およびWRPO事務局（マニラ）へ国内の看護情報（提供：千葉大学看護学部）をE-mailで発信した（6月）。

- ・ Junko Kusakari: "The Theory of International Cooperation in Nursing" - The Expanding World of Nursing through the Activities of the WHO Collaborating Center, Newsletter No.3, 1999

3) Global Network of World Health Organization Collaborating Centers for Nursing/Midwifery Development News Letter Vol.15&16, Winter & Spring, 1998/99に、当センターが発信した日本の助産婦活動について紹介した情報が記事となり掲載された。

5. その他

7月15日、タイのボロマラジョナニ看護大学からファカルティ3名が情報および意見交換の目的で当センターへの訪問があった。

8月4日、英国のシェフィールド大学看護学部Dame Betty Kershaw 先生を招き、"Taking Nursing Education and Practice into the 21st Century"のテーマで講演会をもった。

（センター長：菱沼 典子

委 員：田代順子、押川陽子、酒井禎子、成瀬和子、森 明子）

オリエンテーションセミナー／FD (Faculty Development) 委員会

新入学生オリエンテーションセミナーとFD (Faculty Development) 関係、そして新任教員へのオリエンテーションなどを担当している。

【オリエンテーションセミナー】

新しい大学生活へのスムーズな出発を目的とするセミナーは、1999年4月8・9日の1泊2日社会保険桜上水研修所（東京・世田谷区）で開かれた。企画と運営には、オリエンテーションセミナーを経験した現1年生から4年生の学生ボランティアとすべての教職員の協力を得た。終了後、「セミナーに参加して」と題する文を冊子にまとめ関係者に配布した。なお、2000年度のセミナーは、4月6・7日に社会保険桜上水研修所で予定され企画が進められている。

【FD関係】

教員の教育・研究に資する能力の向上を目的とし、研修会や講演会の企画にあたっている。

〔研修会〕

1995年にスタートした改訂カリキュラムの見直しと評価は、教員の重要な課題であり、カリキュラム評価委員会と協働体制で2回の研修会を企画し運営にあたった。

●第1回：1999年7月26日（月）～30日（金）

テーマ：カリキュラム評価に対するコンサルテーション (Valiga先生「カリキュラム評価」セミナー)

リエゾン・コミティのプロジェクトとして、Fairfield大学のTheresa M.Valiga学部長が来校され、Valiga先生「カリキュラム評価」セミナーが5日間のプログラムで開かれた。内容は、Valiga先生の講演・カリキュラム評価作業の各6グループとカリキュラム評価委員会に対するコンサルテーション・カリキュラム評価全体に対するコメントなどであった。カリキュラム評価に対する知識（概念）と具体的実践との往還がFairfield大学事例を紹介しながらすすめられ、丁寧でわかりやすいコンサルテーションとコメントであった。

●第2回：1999年12月21日（火）13:00～16:00

テーマ：2000年度・2001年度によりよいカリキュラム運用の具体的改善策を考える

方 法：1999・3月と9月の評価会でカリキュラム評価作業グループからだされた課題を中心に改善策や提案に向けてグループ討議を行い、全体発表と討議を通してカリキュラム見直しへの具体化に資する。

〔講演会〕

●連続講演会

講 師：植村研一先生

第1回：6月29日（火）16:00～17:00 「新しい医学教育の試み」

第2回：10月 5日（火）17:00～18:00 「良い教育評価とは ―卒業試験・国家試験を含めて―」

第3回：11月 2日（火）17:00～18:00 「良い教育評価とは ―実技評価を含めて―」

第4回：12月 7日（火）17:00～18:00 「入学者選抜をめぐる」

第5回：2000年2月22日（火）18:00～19:30 「うまい研究発表のコツ ―論文の書き方と学会発表―」

●講演会

講 師：William L Holzemer, RN, PhD FAAN Univ. of California, San Francisco

日 時：12月13日（月）16:00～17:30

テーマ：Nursing 2000: Remembering Our Future ―a dialogue about nursing in the new millennium

【新任教員オリエンテーション】

1999年4月1日～2日に新任教員10名に大学の理念・カリキュラム・図書館・事務関係などのオリエンテーションを行う。

(委員長：小澤道子)

委 員：亀井智子，長江弘子，池谷桂子)

第31回聖路加看護大学公開講座

昨年度（1998年）は、6月に本学でリフレッシュコースの開催、そして9月16～18日に日本看護科学学会第3回国際看護学術集会の主催を本学で担当したため、公開講座A及びBは共にお休みすることとした。学部長より、第30回（1998年1月10・11日開催）を機に、区切りもよいところで、今後の公開講座のあり方を見直そうではないかという提案があり、継続の可否等々が学事協議会で話し合われた。そこで、地域向け公開講座Bは今後中止し、公開講座Aは継続することが決定された。また同時に、公開講座のあり方について検討する、公開講座あり方委員会（委員長：小澤道子教授）が組織された。

公開講座あり方委員会からは、学事協議会宛に次のような内容の見解が回答された（1998年10月20日付）。公開講座は今後も年に1～2回継続していくこと、その内容は、a.国際性、b.看護学を中心に（実践、研究、教育）、c.保健医療看護分野の先端的なトピックス、d.大学院レベルの内容、等のキーワードを中心に、ということであった。開催方法としては、従来のような、年に1回とか2日間にわたってとか、1月に開催、外国人講師を招聘して、といった形式にこだわらず、その年ごとの自由なあり方で、かつ全学的な催しであるので事務局も積極的に関与する委員会方式で、ということであった。

今年度、第31回公開講座委員会は、1998年12月8日に第1回委員会を開き、上記のような主旨を確認して、6月開催を目指しその準備に入った。

第31回は、1999年6月26日（土）、アリスC.セントジョン・メモリアルホールにて、「ファミリー・ナースプラクティショナーによる家族支援—家族機能の活性化をめざして—」というテーマで、Brenda Reiss-Brennan, MS, APRN, CSを講師に招いて実施した。

在宅医療の時代を迎えて家族ケアへの関心と共に、家族に内在する感情的なあつれきや、家族の崩壊等が今日的な問題として注目されるなか、家族機能を活性化するプログラムを20年来実践している講師の講演を中心に、看護職の独立・開業のあり方も含めてとりあげた。1日のみの開催のため、2本の講演を柱に、講演ごとにフォーラムを設けた。ディスカッサントには、本学教員の4名（川越、平林、小松、三橋、敬称略）が当たった。

準備期間が通常より短かったせいもあり、冊子の印刷、参加者の集まり具合等、いくつかの不安を抱えながらの開催であった。また、ディスカッサントの諸先生方には、十分な事前準備の時間がとれずに、多大なご迷惑をおかけしたこともここでお詫びしたい。約330名の参加で、経済的にも赤字を出すことなく（剰余があった）、無事終了することができたのはなによりであった。

昨今は、公立大学を中心に、ほぼ無料に近い廉価な参加費で、外国人講師を呼んだ公開講座が何件も開かれている。さらに看護系の学術集会が年々、数を増して大規模になり、参加者にとっては選択肢が増えている。本学の独自性を発揮しながら、ある程度の集客性を持ち、かつ上記あり方委員会の主旨をも考慮に入れた公開講座の企画運営には、委員一同、ますます頭を悩ますことが多くなっている。

（委員長：羽山由美子

委員：片桐和子、進藤務、豊増佳子、錦戸典子、深谷計子、横山由美）

海外の研究者との活動

1. Dr. Theresa M.Valiga 来学

Fairfield大学のTheresa M.Valiga学部長は、リエゾン・コミッティのプロジェクトとしてカリキュラム評価に対するコンサルテーションのために来校された。Valiga先生の来校は、昨年聖路加国際病院再開発計画事業完成式典に来日された米国聖公会聖路加メディカルセンターのアメリカン・カウンシルの看護部門の代表者Dr.Nancy Sharts-Hopkoと本学教員との協議の中で本学からカリキュラム評価に関する専門家の派遣の要請により実現された経緯がある。

7月26日(月)～30日(金)の5日間、教員研修の一環として「Valiga先生カリキュラム評価セミナー」が開かれた。

プログラムは、Valiga先生の教育講演「看護教育におけるカリキュラム評価」「Fairfield大学のカリキュラム構想とその実際」と、カリキュラム評価作業の6グループとカリキュラム評価委員会の各々の作業と討論に先生が参加されコンサルテーションを受けるグループワークと、そして最終日の全体会でさらにコメントを頂くというものであった。この間、先生は、通常のカリキュラム委員会や教育会議などにも参加された。

評価に対して先駆的な取り組みをされたValiga先生と5日間の「時」と「場」の共有は、私共の今取り組んでいることが評価という道のりの何処にいて何処に行こうとしているのかを知らされ、さらに進む方向への具体的な道標が示された貴重な機会であった。また、Valiga先生から看護教師像として教うことも多かった。

(FD委員会：小澤道子)

2. Dr.Williams L.Holzemer の招聘報告

本年もホルツマー博士（カリフォルニア大学サンフランシスコ校・コミュニティーヘルスシステムの学科長）を11月29日から12月17日の3週間招聘した。この間、大学院修士課程で6コマ（看護研究法）、博士課程で9コマ（看護学方法論）の講義と、加えてファカルティー研修及びグループ・個人ガイダンスをしていただいた。ホルツマー博士は本学博士課程を始めた1988年から我校の大学院教育に関わり、今年で12回目の来学であり、博士自身が言っておられたように「聖路加大学院で一番長くいる存在」である。

大学院の講義では看護研究とくに量的研究の“Rigor”（妥当性・信頼性）を高める研究方法の諸問題を系統的に教授していただいた。焦点は「サブストラクション」を活用して修士課程の学生は研究論文のクリティーク能力を高めること、博士課程の学生は自らの研究領域の複数の研究論文クリティークをSynthesis（統合）する能力を高め、自らの研究計画を練れるよう教授された。

ホルツマー博士の講義に科目担当者として田代は全ての大学院のクラスに出席でき、新任教員として大変有益な経験であったと思っている。ホルツマー博士の講義は周知の通り、その内容が明解かつ具体的で、加えて真摯な教授の姿勢であるので、受講生の知識が整理され、加えて新たに理解が深まる体験であったように思う。加えて、英語で講義を受け、英語でプレゼンテーションをする経験は国際学会などでの活動につながる経験であり、自らの看護専門家としてアイデンティティーをあるいは将来に向けての目標を明確にする体験であったのではないかと思われた。ホルツマー博士の聖路加看護大学での長年の貢献は大学の財産であり、本年とこれまでの博士の貢献に感謝すると共に、2000年の来学も希望したいと考えている。

(研究法：田代順子)

国際学会・セミナー参加報告

1. ICN創立100周年記念会議に出席して

国際看護婦協会 (International Council of Nurses, ICN) 創立100周年記念会議が、発祥の地ロンドンで、1999年6月27日から7月1日にかけて開催された。未来、人権、環境、政策、歴史、実践等の言葉がテーマに盛り込まれた。いわば、“温故知新” セッションであった。

会議前ワークショップから始まり、ICN会長の開会式スピーチ、そしてアン王女の閉会式スピーチまで各会場で多様なプログラムが展開された。

スタルクネヒトICN会長は、「私たちに与えられた最大の使命は、いっそうの健康に向けて、それぞれの社会を先導すること」であり、「看護職全体がもつ、知識と熱意を活用し、健康なライフスタイル、健康な職場、健康なコミュニティの実現を助ける」と力強く演説した。

2日目に行われたWHO事務局長グロ・ハーレム・ブルントランド博士の講演はとりわけ注目された。彼女は中島前事務局長の後任者であり、元ノルウェー首相もつとめたことのある医師である。WHOの課題は健康と環境の関係であるとし、看護職が現場の最前線で健康維持増進のための活動を推進することへの期待を熱く語った。会場からの質問も活発になされた。

ロンドンの街を走る2階建てバスでの通勤がなつかしい。

(聖路加国際病院：井部俊子)

2. 第10回女性の健康問題を考える国際会議参加報告

(The Tenth International Congress on Women's Health Issues)

女性の健康問題を考える国際会議は1983年に世界中の女性の健康とヘルス・ケアに関心を持つ女性達で発案され、1984年にカナダで設立された。この会議の会員は保健・医療の専門家や一般の人々からなり女性の健康と生活の質の向上をその会の使命としている。第10回目の今年は米国のインディアナ大学・看護学部の主催で6月16-19日、インディアナポリスのキャンパスで開催された。

会議の基調講演は看護の質的研究の世界的指導者である Dr. モースが“Responding to the Cues of Suffering” (「苦悩」に答える) と題して行った。シンポジウムは話題が豊富で、国際的視野からの女性保健としてタイ、タンザニア、ジンバブエ、シーラレオネ、フィリピンからそれぞれの健康問題が発題された。

その他、医学的な高齢者の乳癌や乳癌のパップスメイヤー検査についての健康問題が発題され討議された。世界各国研究者の研究発表もなされ、著者も「日本の女子高校生のヘルス関連概念『元氣』『健康』」の質的・記述研究発表をした。

今年はロンドンでのICN大会と重なったため参加者は少ないとのことであったが、小じんまりとしたシスターフッド (姉妹愛) あふれる暖かい国際会議であった。個人的にはイリノイ大学での指導教授のDr.マックレー (McElmurry) やジョルダンの学友と再会ができて有意義な時間を持てた学会参加であった。また、この学会に参加することはアメリカ・カナダのナースは免許更新に必要な継続教育の単位取得の機会であり、私も13単位を取得してきた。日本においても学会の継続教育的な働きを意識してもよい時期かと考えた。第11回は2000年1月26-29日にカリフォルニア大学・サンフランシスコ校で開催される。

(基礎系看護学：田代順子)

3. ISPN年次学術集会参加と施設見学

1999年5月に米国東部の Baltimoreにて、International Society of Psychiatric Mental Health Nurses年次学術集会が開催され参加する機会を得た。この学会は、「思春期精神」、「リエゾン精神看護」および「精神看護の教育と研究」という3つの学会が統合して開催する第1回の学会であった。様々な学会発表とBusiness Meetingにも参加したが、今回の学会のテーマは「アドボカシー」であり、抑制された子供の死亡例についてCBSで特集番組として放映された直後でこの学会でも取り上げられていた。日本においても新潟の国立の精神病院での死亡例があり、日本における患者の処遇と倫理的な課題とがオーバーラップし興味深く聞いた。

次の目的地はBaltimoreよりアムトラックで1時間あまり南に進んだWashington D.C.である。大学院時代、看

護管理学で指導いただいたToni Harrington先生のアレンジメントにて、INOVA Health Systemの急性期治療病院であるFairfax 病院精神科病棟および救命救急部、Virginia州立精神病院を見学した。前者はアメリカ看護協会(ANA) からマグネットホスピタルとして認定を受けたことがある急性期病院、後者は公費による3ヵ月間の長期治療施設である。看護婦の方にインタビューをし、どのような治療看護プログラムを実施して退院計画を進めているのか、またその中で看護婦の役割は何か、退院後のケアについて日米の相違点を知り、治療看護プログラムの日本でのあり方を考える上でよい機会となった。

最後にToni 先生の勤務先であるGeorge Mason 大学 (GMU) を訪問した。GMUは、全米10位内に位置づけられるほどにinternationalの学生を受け入れている州立大学である。本学と同様に米国におけるWHO Collaborating Centerとしての役割をもつGMU看護学部(学部および大学院)を訪問し、主に大学院教育についてadvanced practice担当の教員から説明を聞き、学内を見学した。昼食は大学のカフェテリアでファカルティのメンバーと共に趣味や家族の話など、ざっくばらんな話をし旅の終わりの楽しいひとときを過ごした。Toni 先生には、以前修士論文でも指導をいただき、今回の施設見学でも多大な協力を得た。Toni 先生のアレンジメントに心から感謝している。

(精神看護学：小谷野康子)

4. Women's and Children's Health Issues:A Grobal Perspective 国際学会に参加して

1999年8月9～11日の3日間、ハワイのマウイ島においてWomen's and Children's Health に関する国際学会が開催された。当学会はWHOのコラボレーティング・センターであるUniversity of Cincinnati College of Nursing and Healthが2年ごとに開催するもので、目的は女性および子どもの健康・Health care・well-beingの促進にある。

我々、母性・助産学研究室からは5名が参加し、ポスターによる発表を行った。テーマは「Synchronization between Mother and Infant Sleep Patterns During Brestfeeding Period」および「Why are Small, Continuous, Fixed-Person-in-Charge Mothers' Classes Necessary for Pregnant and Nursing Women?」の2題である。前者では、母児の添い寝という場における研究ということで、そうした習慣のない諸外国の研究者からは、結果に対して興味・関心を示す意見・質問が多く寄せられた。後者については、我が国の母親学級が、主に妊婦を対象にしているといった状況に対して、夫へのケアはどうしているのか、といった疑問が海外の助産婦から投げかけられ、本研究のテーマを今後発展させていく上での示唆が得られた。

その他、シンポジウムのテーマには「Psychophysiological and Behavioral Impact of Domestic Violence in Women」, 「Reproductive Health Issues along the Female Life Span : Impact on Quality of Life」, 「Family Centered Care : A Step Too Far?」等、最新のトピックが取りあげられており、今後の教育・研究活動を進めていくうえで指針となる有用な知見を数多く得ることができたといえよう。

(母性看護・助産学：桃井雅子)

5. McMaster University におけるPBL for Nurse Educatorの研修に参加して

1999年8月に、ミセスセントジョン記念教育基金の助成を受けて「PBL for Nurse Educator」の研修に参加させていただいた。このプログラムは毎年8月に、McMaster Univ.のSchool of Nursingの主催で行われるもので、世界各地から看護教育に携わる人々がPBLに関心を持って集まってくる。今回は、タイの大学の教員や日本では本学を含め5ヵ所の大学の教員が参加しており、すばらしい交流の機会となった。

本来のプログラムは4週間をかけて行われるが、本学から9名(小松、錦戸、豊増、久代、酒井、片桐、池谷、押川、射場)が参加し、主催側の特別の計らいにより、私たちの希望する内容を盛り込んだ10日間の短縮プログラムを計画していただいた。時間的な制限もあり、模擬PBLのtoturingを参加観察することはできなかったが、PBLとは何か、どのような考え方を基盤にした学習方法なのか、実際の準備やTutorの役割について、実施する過程での困難や問題点とその対処など、具体的なレベルで学ぶことができた。また、事例作成のワークショップにも参加することができた。どのセッションもProf. Michele Drummond-YoungをはじめとするSchool of NursingでPBLのコースの責任者、またはTutorをしているベテランfacultyが担当されたので、実践的な内容を学ぶとともに、facultyの教育に対する姿勢やPBLに対する信念が伝わってくる研修となった。

(成人看護学：射場典子)

6. サウジアラビアでの看護教育セミナー

1999年4月29日より5月9日まで、国際協力事業団より短期専門家として、兵庫県立看護大学の山本教授とともにサウジアラビアに派遣された。目的は、サウジアラビアの保健省および保健科学教育機関の職員や教員に日本の看護教育を紹介すること、看護教育や病院の看護継続教育を視察し、日本とサウジアラビアの関係において、看護教育に関する将来の協力の可能性を探ることなどであった。

サウジアラビアはイスラム教の中でも最も戒律が厳しい国であり、一般の観光客（特に女性）の入国は非常に難しいと聞いていたが、リヤドの空港で飛行機を降りるとともに私たち女性はアバヤという黒いヴェールとマントをまとい、全身を黒で覆って初めて入国できた。イスラム圏内でも外国人にまでアバヤの着用を義務づけるのはこの国だけらしい。一見、窮屈に見えるアバヤは全身を隠すため、体型を気にする必要がなくゆったりとして実に快適であることが次第にわかってきた。自宅以外では女性は目を除く全てを覆うが、女性だけの場では、色彩鮮やかな服や宝石やアクセサリーで着飾り、おしゃれであった。

リヤドとジェッダで日本の看護教育制度についてのセミナーを開催したが、首都のリヤドは保守的である一方、地中海に近いジェッダはアフリカ、ヨーロッパの影響を受けており、イスラム文化を守りつつも明るく、開放的な印象を受けた。日本の看護教育についてのセミナーには多くの参加者があり、質疑応答も活発であった。「看護の授業は英語か」という質問がどこでも聞かれたが、これはこの国の医療従事者の9割近くが外国からの出稼ぎ者であるため、医療現場では英語を共通言語として用いているためである。日本では看護を日本語で教えていることに驚かれたとともに「自分たちが留学できるように英語で教育して欲しい」という要望も多かった。

いくつかの病院の視察も行ったが、この国の宗教的背景から、どの病院の外來、病棟ともに全て男女別であり、患者の診療は同姓の医師が担当していた。男性看護師不足のため、男性病棟では外国人の看護婦が勤務していた。教育背景の異なる外国人スタッフの勤務交代が多いため、どの病院でも院内教育部門がきちんと位置づけられ、数名の教育担当看護婦がプログラムを作成し、実施していた。

看護教育機関もちろん男女別であり、教員にしても然りである。この国の看護管理者や看護教員はほとんど全員が外国人であり、国籍も、英国、米国、ヨルダン、エジプト、フィリピン他、多国籍であった。異なる文化で異なる言語で看護教育を受けた人々が、英語という共通言語をコミュニケーションの手段として一同に働いている様子は、「看護」が世界のどこでも共通するアーツであることを改めて痛感した。

今回の訪問では、保健大臣にも40分ほど謁見した。日本への訪問経験がある大臣は日本とサウジアラビアの文化には共通点があることを強調され、サウジアラビアの看護教育の発展に協力して欲しいと話された。看護職の一員として、私たちにできることがあれば可能な限り協力できれば幸いである。

(看護教育学：小山真理子)

1999年度マギル大学夏期語学研修報告

6年目を迎えた本研修の今年度のプログラムは7月30日から8月23日まで3週間行われ、7名（1学年5名、2学年2名）が参加した。昨年度と異なり、出発は前期試験終了後1日おいた30日となったため、わずかの余裕はあったがあわただしいものとなった。

21日間にわたる本プログラムは語学プログラムとカルチャープログラムからなり、前者は主としてクラス内で行うスキル・ベースのプログラムであり、後者にはホームステイ、名所見学、病院見学などのツアーが含まれる。今年度は例年のオタワ、トロント、ナイアガラ見物（希望者はプリンス・エドワード島に1泊旅行）にインディアン・リザベーションのツアーが加わり、全員が参加した。

クラス編成は今年度は聖路加看護大学の7名に加え、他大学の男子学生が1名加わり8名となり、3名の教師が担当した。英語を聞く、話すチャンスが例年より多く、教師間のチームワークもよく参加者の満足度は例年以上であることがアンケートに示された。語学力については全員が、ことに聞く・話す力に著しい改善がみられたとマギル側も評価している。これは、大学側で出発前と帰国後に行ったテープによる達成度のテストにも顕著であった。

担当教師、モニターについては全員高い評価が見られ、ことにモニター制度は当初より参加者の満足度に大きく貢献していることは本年も予想通りであった。ホームステイは週末の3日間であるが、本年はホストファミリーにも恵まれ、それぞれ楽しく貴重な体験を報告している。

今年度はグループダイナミクスがことのほか良好であったことも幸いして、生活全般、宿泊、食事を含めたプログラム全体に対する参加者の評価やコメントにはかなり高い満足度が見られた。

当研修により、英語のコミュニケーションスキルの向上や異文化体験に加えて、帰国後、ホストファミリーやモニターとのe-mailの交換も行うようになり、書くことによる発信力も増強されているようだ。

本プログラムが英語のスキル面の向上と異文化理解の良い動機づけになることを願う。

（英語：助川尚子）